

ガラテヤ書3章13-14節 「呪いからの贖い」

1A キリストによる贖い 13

1B 律法による呪い

1C イスラエルの違反

2C 律法全体の遵守

2B 呪いとなられたキリスト

3B 贖い出す働き

2A アブラハムへの約束 14

1B 異邦人に及ぶ祝福

2B 信仰による義

3B 約束の御霊

本文

ガラテヤ書3章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ガラテヤ2章まで来ました。午後礼拝で、一節ずつ3章の前半部分を見ていきたいと思います。今朝は、13-14節に注目します。「¹³キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。¹⁴それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けようになるためでした。」

何やら「呪い」という、ちょっと距離置きたい言葉が出てきましたね。ちょっと前に、プーチンの顔写真を付けた藁人形を、神社の木にくぎ打ちにして、彼が死ぬことを祈願する呪いがありました。私たちが「呪い」で連想してしまうことは、こんな呪い、いわゆる呪詛と呼ばれるものではないでしょうか？けれども、パウロがここで言っているのは「律法ののろい」とあるように、律法に明確に書かれている呪いで、私たちの連想するものとは違います。けれども、とても生々しいことです。

私が大学生の時に、大学で公認のキリスト者のサークルがありました。その人々を見ていて、「なんで、そういった堅苦しい戒律の中に生きているんだろう。神とか信じないほうが、自由じゃない」と思ったものでした。もちろん、福音を信じて、それは罪から自分を自由にするのがわかりました。信じていない人は、信じている人が、物事が見えなくなると言うのですが、いやいや、信じる前のことはしっかりと覚えていますから、信じてない時に見えていたことも見えていますし、信じてから見えたことも見えています。例えば私は物質しか本質ではないと思っていましたが、もちろん物質にある法則もあることは認めています。それだけでなく霊の世界があることを知っています。思考が自由になりました。それから、信じる前から抱いていた願いも、実はかなえられています。自

分が元々行きたかったアメリカにも留学したし、世界を見たかったという願いもありましたが、いろいろな国に行くことが出来ました。なんせ、キリスト者ですから世界中に仲間がいるわけです。信じる前に抱いていた不自由になるという事は、信じてから全然そうではない事が分かっています。

けれども、同時にあながち間違っていないな、と思うことがあります。イエス・キリストの福音、また聖書とは必ずしも関係のないところで、規則を自分で勝手に作って、それを自分自身に、また周囲の人々に課していくのを見ていく時であります。

例えば、キリスト者の親御さん。子供がまだ信仰を持っていないのに、未信者の人と結婚することに反対していく、ということがあります。まだ、自分の子供でさえ信じていないのに、どうして信じていない相手を受け入れていないのか？と疑問ですね。それから、この世から去った人について、その人が天国に行ったのか？地獄に行ったのか？と議論している姿などあります。人の霊は神のところに行く、ということばが伝道者の書にあり、死後の世界は神の領域です。主に、そういった裁きはお任せすることが命じられているのに、自分自身で神を演じていることさえています。私は若い時には、霊的な地図というものがあって、神社には悪霊どもの巣窟があるから、伝道しても悪霊の惑わしで人々が信じない。だから福音伝道ではなく、まず悪霊祓いが必要なのだとして、イエスの名によって悪霊と地域との関係を断ち切る祈りが必要、というものもありました。でも、聖書を読んだら、そんなこと何一つ書いていないんですね。数えたらきりがありませんが、自由を得るためのキリストに対する信仰だったのに、いろいろな、しきたりで縛られています。こうして、かえって信じる前の姿に後戻りするという逆現象が起こっています。これを、「律法の呪い」と呼びます。

1A キリストによる贖い 13

1B 律法による呪い

1C イスラエルの違反

モーセは、神から律法が与えられ、それをイスラエルの民に伝えました。それは、シナイ山において与えられました。主はモーセを通して、アブラハムに与えられた約束に従い、彼らが確かにご自身に聞き従い、契約を守るのであれば、「あらゆる民族にあつて、わたしの宝となる。..あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」と約束されました(出エジプト 20:5-6)。

そして、それら行っていくべきもの、律法を神がモーセを通して与えました。シナイ山においてだけでなく、自分が世を去る前、約束の地の手前、モアブの草原でも、律法を語りました。それぞれに語った中で、最後のほうで、神の前に祝福があり、また呪いがあるとして、二つの道を説いています。主の命じられたことに聞き従い、律法を守り行うならば、これこれの祝福があり、そうでなければ、神に背いて行けば、これこれの呪いがあると宣言しました。シナイ山においては、レビ記の最後の方、26章に書かれていて、申命記では28章に書かれています。

もし、主の命じたことに背き、聞き従わないのであれば、肺病や熱病(レビ 26:16)にかかります。また、作物を敵が奪い取ってしまいます。そして敵を恐れて、逃亡します(26:17)。厳しい干ばつが起こります。(26:19)。野の獣によって家畜も子供も殺されます(26:22)。さらに聞かなければ、懲らしめはさらに厳しいものになります。敵に包囲されますが、そこで疫病にかかり、敵の手に渡されます(26:25)。そして、なんと自分の子供の肉を食べるのです(26:29)。そして、最後は約束の地から引き抜かれます(26:33)。

こうした律法による呪いが数々ある中で、死がその究極の姿であります。律法によって罰せられ死にますが、その呪いが木にかけられる形で現れます。「申命 21:22-23a ある人に死刑に当たる罪過があつて処刑され、あなたが彼を木にかけるとき、23a その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならない。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。」そうです、本文に引用されているとおりです。死刑そのものは、石打ちです。ローマが、十字架という死刑の方法を編み出しましたが、律法では、死刑にした後に、神に呪われた者であることを示すために木につるすことがありました。

そして、イスラエルは、律法が与えられて生活を始めたのですが、それに背き続ける歩みをしてきました。それがまさに、ヨシュア記以後から列王記、歴代誌に至るまでのイスラエルの歴史です。詩篇の中にも、イスラエルの民が主に見いだされていたのに、彼らが主に背き続けたことが証されています。そして、これら、今、モーセが告げた事柄がすべて彼らの身に行つたのです。これはまさに、イスラエルというよりも、アダムが罪を犯して以来、すべての民族に当てはまる道です。つまり、掟が与えられても、それを行えるどころか、その反対のことを行っていくという罪の姿です。

2C 律法全体の遵守

ここで大きな問題があります。バビロン捕囚にまでなってしまうほど、律法にある呪いが実現してしまいました。そこで帰還した彼らは、もう金輪際、主に背きたくないとして、律法の朗読に励み、律法を遵守していこうとしました。けれども、その熱心さは、それを守り行うこと自体が自己目的化していき、その律法の本質、中身は問われることがなくなっていったのです。パリサイ派の中にある形式主義です。そうすると、彼らの中に問題が出てきました。自分の都合に合わせて、律法をまもっていると見せることができる解釈を施していききました。熱心なように見えていて、実は、細部において守っているようで、最も大事なこと、正義や憐れみを置き去りにしていることがありました。

そこでイエス様が言われたのが、次です。「マタ 5:17-19 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思つてはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。19 ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行う

ように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます。」律法はすべてを守って、なんぼなのです。自分の都合の良いように、取捨選択するようなものではないのです。律法を全体として見て、すべて守り行わなければいけないのだということです。パウロが、申命記に書いていることを引用して、ガラテヤ 2 章 10 節にこう言っています。「律法の書に書いてあるすべてのことを守り行わない者はみな、のろわれる」すべて、律法全体をセットで守り行わないと呪われるのです。

そこで、主が律法の真髓を体現して行かれる中で、この方に触れ、この方の教えを聞いていく中で分かって来ることがあります。それは、神を愛し、隣人を愛していくということが、律法の実践であること。しかし、それが自己中心的な思いでできていないということが、分かって来ることです。自分が、人を裁きながら自分自身を罪に定めていることが分かります。例えば、姦淫の現場でユダヤ人が女を捕えてきましたが、イエス様は、「罪のない人が、初めに女に石を投げなさい。」と言われましたね。それでだれ一人も、石を投げませんでした。なぜなら、彼らも人のことが言えず、自分に罪があること、もしかして姦淫の思いを心に抱いていたのかもしれませんが、罪があることを知ったのです。「3:10 律法の行いによる人々はみな、のろいのもとにあります。」すべての人が、呪いの下にあるのです。

2B 呪いとなられたキリスト

このように、何か規則によって生きていくことの愚かさがお分かりになったかと思います。信仰に加えて、何かを行なうことによって救いが達成できるのだと考えることが、人を再び、がんじがらめにする呪いの中に置かれるのです。

神の福音は、必ず、「しかし、神は」から始まります。これまでの話しは、すべて、「私たちがどうすれば、いいのか？律法を守り行えるのか？」という話なのです。主語が、「私たちは」なのです。主語が、自分たち人間から、神ご自身に変わる時に、良き知らせがきます。自分たちには、何もできなくなっているのです。呪いの下にあります。しかし、神がキリストによってしてくださるのです。ここでは、「キリストは、ご自身が私たちのためにのろわれた者となる」ということです。

キリストが、私たちの上にある呪いを、身代わりにご自身が受けてくださいました。先ほど読みましたが、申命記にあることば、「木にかけられた者は神にのろわれた者」だということです。キリストが、木にかけられた姿を見る時に、そこには代わりに神に呪われた者となってくださった姿を見るのです。イザヤが、身代わりになってくださったキリストの姿を、次のように預言しています。「イザ 53:4-6 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。6 私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、【主】は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」このようにして、主が、ご自身の

いのちをもって、私たちの咎を負ってくださいました。

3B 贖い出す働き

そして、パウロはこれを、「**私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました**」という言葉で言い表しています。贖い出す、です。イエス様がこう言われました。「マル 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」イエス様は、仕える生涯を送られました。自分が受け取るのではなく、一方的に与えていく生涯です。人々の弱さに憐れみ、彼らを強める働きです。その働きの延長、究極のお姿が、文字通り、いのちを与えるというものでした。ご自身を、ユダヤ人たちに裁かれるままにし、ローマの極刑に処せられるままにされたのです。それは、ご自身のいのちが贖いの代価となるためだ、と主は言われます。

代価、という言葉を使っているのが、贖いの意味を知るために必要なことです。買い取ることで、もっと正確に言うと、買い戻すことです。元々は自分のものであったのに、売り渡されてしまいました。それで、対価を払って買い戻すのです。ここではもっと具体的に、奴隷市場で自分が売り渡されていると考えてください。自分が奴隷として、いくらで買うのか？と値踏みされている状況です。そこで、ある人が来て、奴隷商人から買い取ります。その人が、自分に豊かな祝福を与え、恵みを施してくださいます。その主人がキリストご自身だということです。キリストは、金銭で対価を払ったのではなく、ご自分のいのち、流された血が対価なのです。これ以上に大きな対価はありません。いのちほどに大切なものはありません。それを、私たちを律法の呪いから解放するために、対価として払ってくださったのです。

ほかの箇所でもパウロは、こう言っています。「テトス 2:14 キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。」すべての不法から贖い出してくださいました。そして、良いわざに熱心な選びの民としてくださったのです。そのために、ご自身を献げられました。そして、ペテロは、こう言っています。「I ペテ 1:18-19 ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、19 傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」

このようにして、主は買い取ってくださいました！ですから、あなたはもう、主のものなのです！あなたを苦しめている罪、あなたを苦しめてきた悪魔は、もう手出しはできません。エジプトで苦しんでいたイスラエルの民のために、神がどれだけのことをファラオに対して行われたかを思い出してください。神はそこで、何度となくイスラエルを贖い出したことを言われています。同じように、悪魔は手出しはできず、あなたは神の所有、キリストにあって守られ、勝利しています！

2A アブラハムへの約束 14

1B 異邦人に及ぶ祝福

神の福音は、自分が呪いから贖い出されたというだけで終わりません。神のものにされた自分に、神は恵みを豊かに降り注いでおられます。それが 14 節です、「それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。」主が、アブラハムを召された時に、何と言われたかを思い出してみましょう。「創世 12:3b 地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」イスラエルだけではないのです、すべての部族が祝福されるのです！預言者イザヤも言いました、「49:6 主は言われる。「あなたがわたしのしもべであるのは、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのうちの残されている者たちを帰らせるという、小さなことのためだけではない。わたしはあなたを国々の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」」

あなたが、割礼を受けて、モーセの律法を守ってユダヤ教徒にならなければ、祝福されないよ、ということではないのです。あなたが、あなたのままで祝福されるのです。何か、このゆうにならなければあなたは救われない、キリスト者になれないとするのは、呪いですね。神の恵みはあなたを自由にします。そのままのあなたで、キリストのところに来れば、受け入れられるのです。

2B 信仰による義

それは、みことばを聞いて、そして信じることによって義と認められるからです。「信仰によって」とパウロは言っていますね。カイサリアで、ペテロが福音を語った時に、コリネリウスとその一家が聖霊を受けたときのことを思い出しましょう。「使 10:44 ペテロがなおもこれらのことを話し続けていると、みことばを聞いていたすべての人々に、聖霊が下った。」みことばを聞いていただけなのです。もちろん、これは信仰をもって聞いていったのですが、そうしたら聖霊が降ったのです。コリネリウスたちのことをペテロは、エルサレムにいる人々にこう言いました。「使 15:8-9 そして、人の心をご存じである神は、私たちに与えられたのと同じように、異邦人にも聖霊を与えて、彼らのために証しをされました。9 私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」

割礼を受け、安息日を守ったり、また、食物規定を守ったりすることによって、ユダヤ人はユダヤ人として生きていましたが、みことばを、信仰を持っていくことについては、ユダヤ人だけでなく、異邦人にも平等に与えられている能力です。金持ちであっても、貧乏人であっても、学力があってもなくても、男も女も、お年寄りも子供も、みな同じように、みことばを聞いて信じるということはできます。信仰によって義と認められるのです。

3B 約束の御霊

そして、アブラハムの祝福が注がれるのですが、その約束というのは、御霊ご自身であるとパウ

口は言っています。ガラテヤの人々が初めに福音を聞いた時に、キリストの十字架が示されて、そこで御霊を受けていたのです(3:1)。その御霊は、預言者エゼキエルなどを通して約束されていました。「エゼ 36:26-27 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。27 わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」祝福の中で、なんととっても素晴らしいのは、神ご自身の霊が私たちの中に宿ってくださることです！ペテロは、五旬節の時に、ヨエル書を引用して、すべての人が御霊を受ける約束が与えられていることを話しました(ヨエル 2:28-29)。

御霊によって始まったのだから、御霊に導かれていくのです。十字架の言葉を信じて、それで御霊によって、神は私たちが新たに生んでくださいました。神の子どもとしてくださいました。恐れ、奴隷とするような、様々なしきたり、しなければいけないことの奴隷から、解放してくださったのです。イエス様が、その律法の呪いを身代わりに受け取ってくださったからです。